様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21530812
研究課題名（和文）
総合的な学習を中心としたハイブリッド型教育の研究開発
研究課題名（英文）
A Research and Development of Hybrid Education Centered around Integrated Learning
研究代表者
山住　勝広（YAMAZUMI　KATSUHIRO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号： 50243283

研究成果の概要（和文）：本研究は、(1) 学校と学校外の活動システムが協働・交雑する「ハイブリッド型教育」を教育実践の新たな概念として展開した上で、(2)「ハイブリッド型教育」の具体的な実践事例を開発し、その分析を行ったものである。本研究では、大阪府吹田市の公立小学校との共同研究を組織し、地域の伝統野菜の再生と普及をテーマに、学校外の多様なパートナーと協働するハイブリッドな総合的な学習の時間の実践開発を継続的に実施した。その結果、旧来の学校教育の境界を超えるような「ハイブリッド型教育」の意義と有効性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）: This research aimed to develop hybrid education as a new concept in the area of pedagogical practices. It also looked to promote practical research and development activities that actually generated collaborative learning from hybrid education. Joint research within school sites furthered the development of the concrete curriculum and units required for hybrid learning activities within Period for Integrated Study so that associated lessons and learning practices could be established. The children and their teachers engaged in investigative and collaborative learning, which was supported by many groups and individuals that transcended the boundaries of school education. The results have many implications for learning and new ways of teaching in schools of today.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2011 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：ハイブリッド型教育、総合的な学習の時間、学校教育のイノベーション、学習活動、教育実践、協働学習、教育方法学、活動理論

## １．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は、学校におけるカリキュラム・授業・学習を「ハイブリッド型教育」によって拡張的に変化させる、という理論的な作業仮説にあった。そのさい、「ハイブリッド型教育」を、学校が学校外のコミュニティや組織とともに多様なかかわりのハイブリッド（異質で多様な要素の混交）を創り出し、その中で教科横断的な問題や課題を発見して学びのネットワークを築いてゆ

き、知識・技能を活用しつつ、学校外の生産者や専門家とともに問題や課題を探究・解決してゆくような協働の学びを生み出そうとするものと考えた。本研究は、こうした「ハイブリッド型教育」を教育実践の新たな概念として展開した上で、「ハイブリッド型教育による協働の学び」を実際に生み出すために、学校現場との共同研究を組織し、具体的で実践的な研究開発を推進しようとしたものである。

学校と学校外のコミュニティや組織との協働に関する研究は、今日、教育学の分野において多くの関心を集めている。しかし、その内容や形態、長所や弱点に関する詳細な実証的研究は、十分なされているとはいえない。本研究は、学校における新しいタイプの学習活動のデザインを詳細な実証的研究にもとづいて明確に定義して、学校改革のきわめて有望な選択肢のひとつを提示しようという背景をもつものであった。

## ２．研究の目的

本研究は、学校におけるカリキュラム・授業・学習の拡張的な発展をめざし、(1) 学校と学校外の活動システムが協働・交雑する「ハイブリッド型教育」を教育実践の新たな概念として展開した上で、(2) 総合的な学習の時間を中心に、「ハイブリッド型教育」の具体的なカリキュラム・授業・学習を実践的に開発しようとするものである。

そのため、本研究では、学校現場との共同研究を組織することによって、ハイブリッドな教育実践の展開に関する詳細なデータを集め、「ハイブリッド型教育」の具体的なモデル実践の開発を進めるとともに、その成果を分析・検証する。

こうした目的の下、本研究では、地域の絆が希薄化する現代社会において、学校が新たな地域創造の担い手として果たすことのできる積極的役割に注目し、子どもと教師、学校外のさまざまなパートナーが協働・交雑する、ハイブリッドな学習活動の開発について、公立小学校での総合的な学習の時間の実践を事例としながら分析することに取り組んだ。それによって、伝統的な学校における教育方法の狭い概念化の限界を超えてゆくような教育と学習のイノベーションに関するアイデアを提示できるものと考えた。

## ３．研究の方法

まず、本研究では、ハイブリッドな学習活動を概念的にとらえるために、「文化・歴史的活動理論(cultural-historical activity theory: 略称 CHAT)」（以下、活動理論という）を応用した考察を行った。「活動理論」は、さまざまな社会的実践を協働的な「活動システム(activity system)」のモデルを使って分析し、革新的な実践を新たにデザインするためのアイデアやツール、概念を明らかにしようとする理論的な枠組みである。

今日、活動理論は、単独の活動システムへの限定を超え、複数の異なる活動システム間の相互作用、ネットワークやパートナーシップ、対話や協働を分析し新たにデザインする、新しい世代へと発展してきている。

ここでは、こうした活動理論の新しい発展的な概念的枠組みにもとづき、学校と学校外の複数の異なる活動システム（たとえば、小学校、大学、家庭、専門家、コミュニティ組織など）が協働・交雑して行われる教育と学習のイノベーションを「ハイブリッド型教育」と呼び、そこでの越境的・横断的な協働の学びを分析して、ハイブリッド型教育の活動形態がもつ特質を明らかにしていった。そして、ハイブリッド型教育を、学校におけるカリキュラム・授業・学習の拡張的な発展に寄与し得る、教育学の新しい概念として展開することを試みた。

次に、大阪府吹田市立小学校 2 校との 3 カ年にわたる共同研究を組織し、ハイブリッド型教育の具体的なモデル実践の開発に取り組んだ。それは、ローカルな伝統野菜である「なにわ・大阪伝統野菜」の再生と「持続可能な生活(sustainable living)」をテーマに、学校外の生産者や専門家、ボランティア組織、行政機関など、地域の多様なパートナーと協力して、総合的な学習を中心にした協働的で探究的な学習活動を創造しようとするものである。

吹田市立小学校 2 校と協働して取り組んだハイブリッド型教育の実践モデルの開発では、地元の伝統野菜である「吹田くわい（慈姑）」をテーマに、「種から食卓まで」と形容できるような、年間を通した総合的な学習の継続的な実践を開発し、有機農業やエコロジー、食や調理、持続可能な生活について、子どもたちが地域の多様なパートナーと協働する探究的なプロジェクト学習を生み出していった。

これは、「ハイブリッド型の学習活動」の典型的な実践事例となるものであり、有機栽培・自然農法にこだわる地域の伝統野菜農家、生産者や商工者、調理師、専門家、市民レベルでのボランティア活動の「吹田くわい保存会」、地方行政の分野から「吹田市役所産業にぎわい創造室」「大阪府北部農と緑の総合事務所農の普及課」「吹田市教育委員会」など、学校外の多様なパートナーが学校現場と協力して、子どもたちとともにハイブリッドな協働の学びを創り出すものとなっている。

また、大阪府吹田市、高槻市、摂津市、大阪市などの小学校の参加による「なにわ・大阪伝統野菜こどもシンポジウム」や「新聞・作文コンクール」を企画・実施し、異なる地

域の学校間での交流活動を生み出すことにも取り組んだ。

さらに、こうしたモデル実践の開発を典型事例として、ハイブリッド型教育の実践的な意義と有効性を検討・考察していった。そのさい、ビデオ、フィールドノーツ、子どものノートや作品、会議やインタビューなど、実践開発に関する詳細なデータを収集し、モデル実践の成果を分析・検証した。

## ４．研究成果

### (1) 理論的側面での研究成果

本研究の研究成果は、第 1 に、理論的側面として、学校と学校外の複数の異なる活動システムの相互作用、ネットワークとパートナーシップを新たにデザインするための枠組みとなる活動理論を応用し、子どもたちと教師、親、学校外のパートナーが協働するハイブリッド型教育のモデル化を行った点にある。

今日、活動理論は、人々の社会的実践が、「ネットワーク型組織」や「ハイブリッド化」や「緩やかな水平的結合」といった新しいパラダイムに向かっていることをふまえ、異質で多様な活動システムの間のネットワークやコラボレーションを研究する新しい世代へと発展してきている。こうした活動理論の新たな展開では、単独の活動システム（たとえば、学校）への限定を超え、組織・制度・文化・国などの境界を打ち破るような、異なる多様な活動システム（たとえば、学校と学校外のコミュニティや組織）の間の越境や相互作用、ネットワークやパートナーシップ、対話や協働を分析しデザインする、新しい概念的枠組みの発展が課題になっている。

本研究では、この活動理論の発展的な枠組みを応用することによって、ハイブリッド型教育の概念化を進めた。それは、ハイブリッド型教育を、学校と学校外の複数の異なる活動システムの間の境界領域における相互作用を通して、子どもたちの学びを拡張してゆく教育方法そのものの革新ととらえるものである。

このようにハイブリッド型教育は、教室や教科書の範囲内に閉ざされたような、伝統的な学校における教育方法の限界を打ち破ることによって、学校外のコミュニティや組織と協働して、現実の生活の複雑な文脈の中で問題を発見・創造する学習を生み出そうとするものである。それは、「社会的に孤立した学校」や「教科書の知識の伝達や正しい答えの獲得に閉ざされた形式的な学習」を特徴とする、伝統的な学校における教育方法の狭い概念化の限界を超え、教育実践の転換を可能にするものと考えられる。

### (2) 実践的側面での研究成果

本研究の研究成果は、第 2 に、実践的側面として、総合的な学習の時間を中心に、ハイブリッド型教育の具体的なカリキュラム・授業・学習の実践的な開発を進め、その実践モデルを構築して提起したところにある。

本研究では、こうした実践モデルを開発するために、3 カ年にわたり継続して、吹田市立小学校 2 校との共同研究を組織した。

このようなハイブリッドな教育実践の展開に関する詳細なデータを収集し、その分析・検証を進めることによって、主要には次の 5 点が明らかになった。

① ハイブリッド型教育は、地域において学校が、外部のさまざまなパートナーと交雑して、学校外のコミュニティや組織とともにハイブリッドな協働活動を創造し、そのことを通して、子ども、教師、保護者、学校外の多様な参加者たちの間に相互的な学びあいを生成するものとなる。

② ハイブリッドな教育イノベーションにおいて、小学校の子どもたちと教師、大学の学生と教育研究者、学校外のさまざまな個人や組織は、決して固定的で強いネットワークを構築しているわけではない。にもかかわらず、これら多様なパートナーは、活動の対象を部分的に共有し、互いの活動を柔軟かつ即興的に協調させることによって、協働の活動をつくり出している。この異なる個人や組織が緩やかにつながり、特定の個人や固定した組織がコントロールの中心になるわけではなく、活動の主導権を刻々変化させながら行う協働の行為を、「結び目(knot)」の創発、すなわち「ノットワーキング(knotworking)」と喩えることができ、その比喩の下、特質の分析を進めることができる。

③ ノットワーキングの中の総合的な学習において、学校外のコミュニティや組織や参加者は、いわば「学びの提供者」となって、その時々に変化・交代しながら学びあいのイニシアティブを発揮する。子どもと教師は、そのような多様な出会いや関わりのハイブリッドの中で、教科横断的・総合的な問題や課題を発見し、知識・技能を活用しつつ問題や課題を探究・解決してゆくような「協働の学びあい(collaborative learning)」を生み出してゆく。こうしたハイブリッド型教育における結び目の生成は、学びの潜在的に多様な資源を結びつけ互いにやり取りさせるものになる。

④ 総合的な学習を中心としたハイブリッド型教育の実践が、教科書や教室の閉ざされた壁を打ち破り、学校の外側に存在する多様な他者や異界といった社会的世界との出会いの経験を通して、子どもたちに社会と関わる積極的な「足場」をもたらす。このことは、子どもたちが社会や他者との連帯的な行為

を創り出し、それによって自己変成を遂げてゆくような学びの生成を、強力に示唆するものである。

⑤ 教室外の多様な組織やグループ、人々の間でのノットワーキングへ参加することによって、子どもたちは、地域における伝統野菜の生産や有機農業の活性化、生産物の創造的な利用、「スローフード」といった新たな食生活の実践など、地域社会と日々の生活をよりよく変えてゆこうとする社会運動やアクティビズムに出会うことになる。ノットワーキングの方法によるハイブリッド型教育の実践は、新たな地域創造のための協働活動へ積極的に貢献するような能動的な学習を、子どもたちにもたらす可能性をもつ。

(3) 研究成果の位置づけとインパクト、今後の展望

以上の研究成果は、第1に、学校における教育実践の新しい拡張的な形態について、厳密な理論的研究にもとづく高度な理解をもたらしている点、そして第2に、そのことと有機的に結合してハイブリッド型教育の具体的なモデル実践の開発を進め、その展開に関する綿密な実証的研究から得られたエビデンスにもとづき学校教育のイノベーションを提起している点に、大きな意義と重要なインパクトを有するものである。

こうした研究成果は、学校の中に、子どもたちが多様なパートナーとともに地域文化の創造へ参加し、地域社会をよりよく変えることに貢献してゆく拡張的な協働的学習活動を生み出すという、ハイブリッド型教育の今後におけるさらなる発展を展望させるものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）


① 山住勝広、冨澤美千子「『結び目』の中の総合的な学習―ハイブリッドな教育イノベーションの活動理論的研究」、『関西教育学会研究紀要』、第 12 号、17-30 (2012)、査読有
② 山住勝広「野村芳兵衛における『本を作る教育』のカリキュラム―教科書なき生活単元学習の展開」、関西大学『学校教育学論集』、第2号、25-31 (2012)、査読有
③ 山住勝広「文化・歴史的な活動としての学習―活動理論を基盤にした教育実践の探究」、関西大学『文学論集』、第61巻第3号、85-108 (2011)、査読無
④ 山住勝広、冨澤美千子、伊藤大輔、蓮見二郎「生活創造としての学習―放課後教育プロジェクトにおける協働活動の生成」、日本教育方法学会『教育方法学研究』、第 36 巻、133-143 (2011)、査読有
⑤ 山住勝広、冨澤美千子「野村芳兵衛における生活学校の発見と創造―児童劇の協働自治的実践を中心にして」、関西大学『学校教育学論集』、第 1 号、29-39 (2011)、査読有 http://hdl.handle.net/10112/4409
⑥ 山住勝広「野村芳兵衛における教育原理としての協働自治」、関西大学『文学論集』、第 60 巻第 3 号、101-120 (2010)、査読無 http://hdl.handle.net/10112/2776
⑦ 山住勝広「エリ・エス・ヴィゴツキーの教育思想と新教育」、関西大学『文学論集』、第 60 巻第 2 号、85-101 (2010)、査読無 http://hdl.handle.net/10112/2775


〔学会発表〕（計１３件）


① Yamazumi, Katsuhiro, Building a platform of learning for community revitalization: Toward an expansion of school activity. Lectured at the invited symposium ‘Studying change in and across institutions’, *Third Congress of the International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR)*, 招待講演, 2011年9月7日, ローマ大学（イタリア）
② 山住勝広「結びあうハイブリッドな学習活動の創造―地域の伝統野菜をテーマにした教育実践の開発に関する活動理論的研究」、日本教育方法学会第46回大会、2010年10月9日、国士舘大学
③ 山住勝広「創造性の教育と創造都市―活動理論の観点から」、韓国創造都市会議、招待講演、2010 年 9 月 3 日、釜山国立大学（大韓民国）
④ 山住勝広「地域創造の担い手としての学校―活動理論にもとづくハイブリッドな教育イノベーションに関する日本・シンガポール共同研究」、日本教育学会第69回大会、2010年8月21日、広島大学
⑤ Yamazumi, Katsuhiro, Toward an expansion of school learning through real-life activities: Activity-theoretical developmental intervention research in Japan, *The First Invitational International Workshop for Sociocultural and Activity-theoretical Research Centers ‘Collective Creativity and Learning’*, 招待講演, 2009年12月21日, ヘルシンキ大学（フィンランド）
⑥ 山住勝広「総合的な学習を中心としたハイブリッド型教育の創発」、日本教育方法学会第45回大会、2009年9月26日、香川大学
⑦ 山住勝広「探究的で拡張的な学びのプラットホームを築く―ノットワーカ(knot-worker)としての専門家の新たなアイデンティティを求めて」、第 6 回学校図書館ジャムセッション、招待講演、2009年8月10日、群馬県立尾瀬高校

〔図書〕（計５件）

① Yamazumi, Katsuhiro, Schools that contribute to community revitalization. In K. Yamazumi (Ed.), *Activity theory and fostering learning: Developmental interventions in education and work*. Center for Human Activity Theory, Kansai University, 133-160 (2010)

② Yamazumi, Katsuhiro, Toward an expansion of science education through real-life activities in Japan. In Y.-J. Lee (Ed.), *The world of science education: Handbook of research in Asia*. Rotterdam: Sense Publishers, 187-202 (2010)

③ Yamazumi, Katsuhiro, Expansive agency in multi-activity collaboration. In A. Sannino, H. Daniels, & K. Gutiérrez (Eds.), *Learning and expanding with activity theory*. Cambridge: Cambridge University Press, 212-227 (2009)

④ 山住勝広「ニュースクール・プロジェクト―学びあいのプラットホームを築く」関西大学人間活動理論研究センター編著、山住勝広監修『学びあう食育―子どもたちのニュースクール』、中央公論新社、10-25 (2009)

⑤ 山住勝広「学びあう食育へ―持続可能な生き方のために」、関西大学人間活動理論研究センター編著、山住勝広監修『学びあう食育―子どもたちのニュースクール』、中央公論新社、153-161 (2009)

〔その他〕

ホームページ等

http://www.purela.org

６．研究組織

(1)研究代表者

山住　勝広　(YAMAZUMI　KATSUHIRO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50243283